

本書の著者、茂洋氏は、ティリッヒ研究者の中で、ティリッヒと直接言葉を交わしたことのある世代に属しており、日本における学問的なティリッヒ研究の先駆者の一人である。「はしがき」において述べられているように、氏のティリッヒ研究は、一九六〇年に来日したティリッヒとの出会いから開始され、その成果は、まず『ティリッヒ組織神学の構造』（新教出版社 一九七一年）として公にされ、さらには『ティリッヒの人間理解』（新教出版社 一九八六年）に結実した。本書は、これら先行する二冊の著書と合わせて、いわば茂氏のティリッヒ研究三部作をなすものと言える。この間の氏のティリッヒへの関心は、一貫して、『組織神学』（全三巻）を中心とした後期ティリッヒの神学思想、とりわけ人間理解に置かれてきた。また本書は、茂氏のティリッヒ研究の発端であるティリッヒとの出会いに際して、ティリッヒが語った、「可能なら自分の神学を聖霊論から再構成してみたい」という課題に対して、氏自身が正面から取り組んだものであり、その点から、茂氏のティリッヒ研究の到達点を示すものと位置づけることができる。本書 全体が七つの章と二つの収録（講演）から構成されている には、前書『ティリッヒの人間理解』出版以降の論文あるいは口頭発表・講演が収められているが、その中心テーマは、ティリッヒの聖霊論であり、その基礎をなす存在と生の分析に多くの頁が割かれている。以下の書評では、本書における茂氏のティリッヒ論を概観し、最後に、書評者としてのコメントを行いたい。なお、内容紹介は、各章ごとに行うのではなく、本書全体から、茂氏のティリッヒ解釈の特徴を取り出すという仕方で行うことにする。

茂氏のティリッヒ解釈のポイントは、以下のようにまとめることができる。

一、「ティリッヒの思想は、存在とともに始まり、その存在理解の上に、彼の神学は構成されている」（三五頁）

「ティリッヒ神学は存在論的である」という指摘は、或る場合はティリッヒ批判の言葉として（「存在論的＝非聖書的」など）また或る場合は、ティリッヒを肯定しつつ（「存在論的＝根源的」など）多くの論者によって行われてきた。本書も、まさにこの地点からティリッヒ神学の分析が開始される。すなわち、『組織神学』の第二部「存在と神」の前半において展開されている人間存在の基礎構造の議論から、まず存在論の内容が要約され、その上で、存在論と神学との差異が指摘されるのである。ティリッヒの存在論に関する氏の議論で注目すべきは、「思想は存在とともに始まらねばならない」、したがって、神学的思惟も存在とともに、存在という根本的な地点から開始されねばならないという点と、存在論には存在と非存在が含まれているという点であろう。存在から人間理解を開始するということは、人間をその全体において捉えること、たとえば心身二元論を取らないということの意味している（「第六章 身体理解」でとくに強調されるように）。また、存在論が非存在を含むということは、人間は非存在の脅威による不安の中でおも生きる勇気（自己肯定）を可能にする根拠（存在の力）を問わざるを得ないということに他ならない。存在論の課題は、人間存在に固有の問いを定式化することにあるのであって、それにより、この問いへの答えとして、神学が宗教的象徴を解釈する場が開かれることになるのである。この意味で、「ティリッヒ神学は存在論的である」。しかし、宗教的象徴にお

いて提示された答え自体は、啓示に由来しており、神学は存在論とは区別されねばならない。

二、「生きる神の主張は、『神を超える神』(God above God)の概念に導かれる」(四一頁)

本書における茂氏のティリッヒ理解の特徴は、「神を超える神」への言及の中に認めることができる。これは、存在と非存在を含む存在論が自己を肯定する勇気の源の問いへと至るといふ先の論点と結びついている。具体的な宗教的象徴の与える答え(制度的な宗教の与える答え)は、それ自体有限であり、非存在の脅威を免れていない。つまり、人間が直面するぎりぎりの限界状況においては、有神論の神が意味を失ってしまうという可能性を排除できない。「神」という宗教的象徴が無意味化したときに、人間にとっていかにして生きる勇気が可能になるのかという問いに正面から取り組んでいること、ここにティリッヒの神論の核心点が見出されるのであって、まさにこれが「神を超える神」の問題なのである。茂氏は、「神を超える神」の重要性を強調し、さらに、これを宗教的象徴における超越的レベルと内在的レベルの二重性の問題へと展開している。神についての人間の思惟(神論)を「神」(神という象徴表現の指示対象=非象徴的要素)は超えている。

三、「本質から実存を経て本質化への道」(九二頁)

本書における『組織神学』(全三巻)の解釈の基本方針は、その体系全体を、「本質(第一巻) 実存(第二巻) 本質化(第三巻)」という図式において再構成するという点に認められる。これは、茂氏が晩年のティリッヒから示唆を受けて本書で試みた、聖霊論から神学を再構成するという課題に即したものであり、この神学体系の弁証法的構造が、『組織神学』(全三巻)の全体を解釈する上できわめて重要であることは疑いもない。聖霊論からティリッヒの神学体系の諸問題を論じる茂氏の議論はきわめて明瞭で魅力的である。

四、「一義的(unambiguous)な生への問いが潜在的にあり、unambiguous なものを求めようとする力が働く」、「ambiguity から unambiguous なものを求めるところに、霊(spirit)が働くことになる」(五五頁)

人間存在を、「本質から実存を経て本質化への道」という弁証法的構造において理解するという試みは、本質化(一義的なものの現実化)が実現する場である生の問題とこの現実化を推進する力である聖霊の問題について、より具体的に論じることを要求する。「霊ともにある」「本質化」とは、生の両義性(本質と実存の混合)から生じる問い(一義的なものの問い)への答えとして位置づけられるからである。この点について、茂氏はいくつかの重要な論点を取り上げている。

「ティリッヒ自身は、聖霊論、教会論、終末論と分けることなく、自らの神学を、『霊ともにある』(Spiritual Presence)という思想で、全部を包み込んで展開した」(一〇二頁)

本書では、ティリッヒにしたがい、一義的なものが人間に関係するあり方として、次の二つのものが取り上げられている。一つは、歴史の内部で生きる人間が一義的なものを断片的な仕方ですりすましに経験し、一義的なものの現実化に参加するという仕方であり、もう一つは、こうした断片的な現実化によって先取りされている歴史を超えた終末における一義的なものの最終的成就への上昇という仕方である。もちろん、この最終的成就自体は歴史の内に生きる人間の経験を超えているが、人間の生はこの目標に向けて常にらせん的に希望の内を前進するのである。断片的で予期的な現前と最終的成就への上昇運動(希望)の二重性。ここに、聖霊論、教会論、終末論の緊密な連関が見出される。

「『実存の今』のうえに『永遠の今』がある」(九六頁)

この一義的なものにおける断片的先取りと最終的成就との関係は、時間と永遠との関係として表現できる。それは、実存の今(いま・ここ)のいわば「上に」、永遠の今が経験されるということであり、実存のいま・ここが、時間のうちにありつつも、それを越えた永遠性に参与している、あるいは永遠的なものに断片的予期的に参与しているということに他ならない。

「ティリッヒは、いつもあるがままに自分をしっかり見つめることを求め、その自分の存在、それがたとえどんなに弱くとも自らを肯定する勇気のうちに、自らの内にある存在それ自体、神の根拠を見出すと主張しているのである」(四八頁)

「霊ともにいます」あるいは「神ともにいます」という表現が示すように、ティリッヒ神学の特徴は、一義的なもの・永遠的なものを、人間の有限な生の領域(時間的歴史的)から区別しつつも、しかし、断片的あるいは予期的に、人間存在が永遠に参与し、非存在の不安を超える勇気を持ち得ることを明確に語っている点に認めることができる。これは、不安、無意味性、両義性の中において苦しむ人間に対する慰めのメッセージであり、また宗教的な救いを心(ロロ・メイの指摘するティリッヒ神学の心理学的意義)や身体(身体論への射程)を含めた人間存在の全体性において捉えるものと言える。茂氏のティリッヒ研究は、こうしたティリッヒの神学が有する暖かさと慰めを明確に描き出しており、本書で論じられた、勇気、いやし、健康、恵み、充実、成熟というキーワードは、ティリッヒ神学を特徴づけるのにふさわしいものと言えよう。

以上見た茂氏のティリッヒ解釈が高い評価に値することは言うまでもないが、ここでは、むしろ疑問に感じたことを中心に若干のコメントを行うことによって、書評者として責任を果たすことにしたい。

茂氏のティリッヒ研究を全体として評するとするならば、それはパラフレーズ型の研究と表現することができるであろう。ティリッヒ研究に限らず、特定の思想家の思想研究には、その思想家の思想を忠実に要約しそれをより明確に表現することをめざすタイプ(パラフレーズ型)、その思想家の立場とは異なる立場を前提としそこから批判的評価を行うタイプ(外部視点に基づく批判型)、そしてその思想家のテキスト自体から解釈の視点を構成しつつも思想家の立場の整合性や妥当性を分析するタイプ(批判的構成的分析型)といった諸類型が見出される。茂氏の研究は、これら三つの内で、最初のパラフレーズ型の典型と言えるであろう。実際、茂氏のティリッヒ研究は、ティリッヒ自身の著書(しかも、一九五〇年代のもの)を中心にしており、関連する他の思想家やティリッヒについての二次的な研究文献に言及することはほとんどない(ロロ・メイを例外として)。いわば禁欲的なまでに、後期ティリッヒに集中した研究であり、これには、当然長所と短所がある。

一方で、ティリッヒの主張を忠実にパラフレーズすることはティリッヒ研究において不可欠の作業であり、これなしには、学問的なティリッヒ研究はなりたない。しかし他方、ティリッヒの主張を批判的に検討し掘り下げるという点で、パラフレーズ型はものたりないと言わざるを得ない。たとえば、ティリッヒ神学は存在論的であると言われるが、では、「存在論」あるいは「存在論的」とは何を意味しており、「神学が存在論的であること」にいかなる問題点が含まれているのか、また「神を超える神」は後期ティリッヒの神学自体においていかなる位置を占めているのか 『組織神学』第二巻序論で、ティリッヒは

「神を超える神」は教義的な発言ではなく、弁証論的な発言であると述べているが、それをどのように解するか、といった論点は、茂氏のティリッヒ論では問われることのないままになっている。ここでは、とくに、次の二つの点について、問題点を指摘してみたい。

第一の問題は、先に指摘した「本質から実存と経て本質化へ」という枠組みで『組織神学』（全三巻）を解釈するという、本書のティリッヒ解釈の中心的視点に関わっている。

「可能なら自分の神学を聖霊論から再構成してみたい」というティリッヒの発言を具体的に検討することが、本書の問題設定であることから予想されるように、茂氏は、ティリッヒの『組織神学』（全三巻）の全体を第三巻から解釈することを試みており、それが、「本質から実存と通して本質化へ」という枠組みの強調に至るのは十分に了解可能な展開である。しかし、問題は、このティリッヒ自身の課題の提示にもかかわらず、こうした聖霊論（第三巻）から全体を弁証法的構造で捉える解釈が、果たして現に提示されている『組織神学』（全三巻）に真に妥当するののかという点である。これは、日本では森田雄三郎氏（『キリスト教の近代性』創文社）によって提起され、またサッチャーの古典的なティリッヒ研究（Adrian Thatcher, *The Ontology of Paul Tillich*, Oxford University Press 1978）で指摘されてきた問題点であるが、本書にはこの点についての言及は見られない。争点は、実存と生、あるいはキリストと聖霊の関係が、『組織神学』（全三巻）でどのようになっているのかということであり、私見を述べれば、一方でティリッヒの叙述には、この点に関し、第二巻と第三巻の間に不整合が見られる、しかし他方、生の議論あるいは聖霊論から体系全体を理解することはティリッヒの意図に即しており、その意味で、茂氏の解釈は結論的には肯定的に評価できる。しかし、こうした研究史の議論がいわば存在しないかのような論の進め方については、厳しいコメントをせざるを得ないであろう。

第二の問題は、そもそも、後期ティリッヒの神学体系はティリッヒ神学全体と同一視できるのか、『組織神学』（全三巻）は半世紀を超えるティリッヒ神学の展開の中でいかなる位置を占めているのか、ということである。この問いは、書評者が本書を読解した後に残った最大の疑問点であった。近年ティリッヒ研究は初期前期ティリッヒの従来未公刊であった多くの文献が次々と刊行されることによって新しく段階へと進みつつあり、今後ティリッヒ研究を志す者は、先行研究の到達点に安住することは許されない。とくに、以上紹介してきた茂氏の研究との関わりで言えば、氏が論じた『組織神学』（全三巻）を中心とした後期ティリッヒの思想は、新たに利用可能になった初期や前期の文献との関係において、再度読み直されることによって、より深められたティリッヒ理解が目指されねばならないであろう。本書「あとがき」で指摘されるように、「ティリッヒ神学」は、「いつも新しく解釈し直されていく必要がある」のであって、読者は自らの場において自分自身のティリッヒ研究を推進して行かねばならないのである。そしてこれが、茂氏の卓越した研究を適切に継承するものとなるであろう。